

げんでん ふれあい 福井

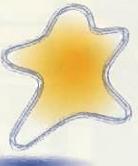
2013 SUMMER 第45号



第16回 ふくい風花隨筆文学賞 入賞作品紹介

ふるさと福井「酒井小浜藩初代藩主・江戸幕府大老
人物シリーズ」
酒井 忠勝(三)

公益財団法人「げんでんふれあい福井財団」は、福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的に、県民のみなさんとの絆を大切にした広報誌を目指します。



財団シンボルマーク

目次 45

●第16回 ふくい風花隨筆文学賞

入賞作品紹介 2 ~ 5

●ふるさと福井人物シリーズ

「酒井小浜藩初代藩主
・江戸幕府大老
酒井 忠勝(三)」 6 ~ 7

●ふくいの伝統行事シリーズ

「高浜七年祭り」 8

●敦賀市立博物館

誌上ギャラリー / 39 9

●福井の民俗文化 シリーズ 10

「雄島参り」 10

●情報ファイル

11

表紙の説明

(表紙の写真は、高浜町高浜七年祭り)

詳細は本誌8ページ参照

高浜の七年祭りは、佐伎治神社の式年大祭で、巳年と亥年の7年ごとの祭り年に行われる夏祭り(旧暦6月)を「七年祭り」と呼び、正月の初寄合から奉納芸の組織が編成され、町を挙げて盛大に取り組まれてきました。今年も6月30日から7月6日まで「中ノ山」「西山」「東山」の豪華な神輿が町内を巡幸し、それぞれの山元の担当区から太刀振や神楽、お田植・曳山・子供踊りが華やかに奉納されました。

第16回 ふくい風花隨筆文学賞 入賞作品紹介

「ふくい風花隨筆文学賞」(同賞実行委員会・福井県主催、げんでんふれあい福井財団特別協賛)の授賞式が、3月16日福井新聞社風の森ホールで行われ、審査委員長の津村節子さんらが佳作以上の入賞者を作表彰しました。

この文学賞は、福井県出身の芥川賞作家津村節子さんの隨筆「風花の街から」にちなんだ賞で、平成9年だ賞で、平成9年度に創設され、毎年国内外から多くの作品が寄せられています。

一般の部 (応募作品数 1655編)
▽ 『最優秀賞・福井県知事賞』
和井田勢津(青森県)「風呂敷包み」
▽ 『優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞』
藤田智恵子(青森県)「あの遠い記憶が」
▽ 『優秀賞・福井新聞社賞』 遠藤薰(千葉県)「遠い...旅立ちの日」
▽ 『優秀賞・福井仁愛学園賞』 土居義彦(愛媛県)「花は咲く」
▽ 『優秀賞・錦糸帖始(東京都)』「にぎりめし」
▽ 『優秀賞』 菊池和徳(沖縄県)「バルさんの鳴サブレ」

高校生の部 (応募作品数 1659編)

▽ 『最優秀賞』 加藤玲佳(武生商業高校)「祖母と書道」
▽ 『優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞』 河合慎一介(福井農林高校)「一いつてうつしやい」の力
▽ 『優秀賞・福井新聞社賞』 片桐聰子(藤島高校)「通心技術」
▽ 『優秀賞・福井仁愛学園賞』 山田瞳子(武生商業高校)「祖父」
▽ 『優秀賞』 米川稜也(高志高校)「感謝の言葉」



当財団の高辻理事長から表彰を受ける
河合慎一介さん



福井新聞社 風の森ホール
津村節子先生・満田豊福井県副知事(前列中央)
受賞者・審査委員・実行委員会の皆さん

一般の部

**最優秀賞
福井県知事賞**



和井田勢津さん

(青森県)

—受賞のことば—

ふくいの街から届いた花束の重さをすっしりと受け止めています。

小さな風呂敷包みを見つけて
ことで次々浮かび上がってくる
思いに、押されるように書きま
した。それがこのように大きな
賞をいただき、よろこびはひと
しおです。

あこがれの津村節子先生にお目にかかることができ、忘れられないしあわせな一日となりました。審査の先生、実行委員会の皆様ほんとうにありがとうございました。

人は小さなものを持つ残していく。それが十数年の時を経て、ある日突然あふれるほどの大きな思いを引き起こすという不思議。震災、別れ、哀しみは今も静かに続いている。その中で小さな風呂敷包みがほのかに光って私には見えました。一人のひとが生きる、生きた尊さのようなものだったのか、と今なら思います。

傍らを通り過ぎて行った人々が置いていったもの。そして自分が残すもの。「ふくい風花隨筆文学賞」は「これからも書き続ける」という一粒の種を私にくれました。

ありがとうございます。

その風呂敷包みは押し入れの左隅に
立つ。量少しうつ二、三

じうより「いた」と私には思えた。

「なんがヨシ」見当のいたなしのまま、
みを解くと、中から紙袋に入った洗面
器とタオル一枚、小さな箱が出てきた。
義母のものだった。

三十数年前 孫が生まれたのをきっかけに夫の両親が時折八戸を訪れるようになつた。タクシーと電車を乗り継いで片道四時間、孫の顔を見て夕食と共にし、一つ二つ泊まって帰る。私たちにとってもしあわせなひとときだつた。

「こりどつかに置いてちょうだいね。これがあるとまた泊まりに来れるからね」 その、小さな風呂敷包みだった。いつたい何が入っているのか

義母は昭和八年の三陸津波で両親を失い、自分も足に大怪我を負った。一歳だったという。以来不自由な足で水汲みから畠仕事力仕事何でもこなし、六人の子を育てた。家族のためにひたすら働き通した。田舎の大家族だけに、その苦労は計り知れない。

一人でどこかに出かけることのない
義母にとって、孫たちに会いに八戸まで出かけることは大きな楽しみだった

すりみ汁、どんこ汁、鮑の塩辛、など
海の幸に恵まれた故郷田老の味は、夫
にしつかりと受け継がれている。

家の裏手には高さ十メートルの防潮堤がある。義母は不自由な足で一步一歩その階段を上り、反対側の小さな畑で草花やキウイを育てていた。好きな草花と触れるしあわせな時間。幼くして引き裂かれた父母と語らえる唯一の場所だったからかもしれない。

その防潮堤を、津波は易々と越えた
義母の両親と足の自由を奪つた三陸
大津波。七八年後、津波はまた、義

妹を呑みこんだ。運命だとあきらめきれない悲しさだけが残る。母と娘は田老で生まれ、田老の土に還つた。押し入れの中で十数年もの間ずっと息をしていた風呂敷包み。もし震災前

に見つけていたら、これほどの深い思いは抱かなかつたことだろう。

大震災で何もかも失われた今、この小さな風呂敷包みだけが手元に残った唯一の形見を残してくれたのだと思った。

小さな箱には、携帯用の鏡と温度計そして足袋力バーが一足入っていた。

座る時いつも遠慮がちに足をそつと隠していた義母。その足を初めて見た気がした。

高校生の部
最優秀賞
福井県知事賞



加藤玲佳さん
(福井県立
武生商業高等学校)

「祖母と書道」

一受賞のことば一

この度は、このような素晴らしい賞をいただくことができ、大変嬉しく思います。

今回の作品では祖母のことを中心に書かせていただきました。祖母は自分の名前よりも長年待ち続けてくださった方々のために自分の体力が尽き果てるほど思いを込めて書き続けていました。

祖母は感謝の気持ちを書道で伝えました。私は祖母のこの行動に心が動かされました。私が周りの人へ感謝の気持ちを持って行動してもなかなか伝えることは出来ません。

祖母のように感謝の気持ちを上手く伝えることは私には難しいことです。ですが時間がかかるかも、手間がかかるかもいいので私も祖母のように感謝し続けていきたいです。

そのためにもまずは、いつもお世話になっている人へ、そして感謝の大切さを教えてくれた祖母へ感謝したいと思います。

私の周りにはたくさんの人だからができた。というより、私が押している車いすを囲むように人ばかりがきていた。着物姿の品の良さ、そうな人や、おろしててのような新品の紳士服を着た人。この場に来なかつたら一生お目にかかることは出来なかつたであろう人達の中に、時代遅れのワンピース姿の祖母が座っていた。そんな祖母に人が集まるのも無理はない。なぜなら、この書道展覧会に祖母は十年ぶりに姿を現したからだ。

祖母は現在八十五歳。若い頃から国語教師として、そして書道家としての人生を送ってきた。かかさず毎年書道展覧会に作品を出品し、数々の賞を受賞していた。そんな祖母が十年前、出品するのを止めた。というより止めざるをえなかつたのだ。毎年祖母の作品を楽しみにしていた人達からは、電話や手紙、面会がとだえなかつた。しかし、電話や面会など祖母に繋がるもの全て断つていたため、亡くなつたのではないかといふ話まで出回つた。確かに祖母はそれちかかつた。祖母は十年前、急に倒れ、救急車で運ばれた。一度は心肺停止にまでなつた。手術のおかげで無事助かつたものの、意識も

体力もなかなか回復しなかつた。医者の話では、意識が戻り問題がなければ退院できるが、寝つきり、車いす生活になるだろうと言われた。周りは寝つきりでも生きていられるだけで十分だと安心していた。しかしながら中、私は安心してはいられなかつた。

私は安心しきれないまま祖母の退院の準備を手伝つた。階段に車いす専用のエスカレーターをつけたり、段差をなくし手すりを増やしたりと家での生

活を快適に過ごせるようにリフォームした。

そして祖母が退院し、新しい我が家へと足を踏み入れた。嬉しそうに幸せそうに家じゅうを見て回り私に車いすを押させ部屋に戻つた。二人の沈黙に先に口を開いたのは祖母だった。

「頼みたいことがあるんや。」

とどつとつと話していく祖母の一言ひとことに驚いた。

部屋をうめつくすほどの大きな紙、バケツいっぱいの墨、そんな白の中心に祖母が小筆片手に腕まくりをして立つていた。

祖母は倒れてから十年間かかさずりハビリをし、自分の足で立つて歩けるまでになつた。そして書道家としての

一步をまた歩きだそうとしている。祖母の頼みごととは、その手助けをしてほしいということだった。祖母の体のことを考えるならば、きつくなつて断るべきだった。しかしその時の私は大きくなづいていた。

昔の祖母なら下書きや構成など一週間もかからなかつた。しかし今回は一ヶ月以上もかかってしまった。今までよりも紙が大きいせいか下書きを一枚書くだけで祖母の体力は限界そなつた。これから何枚も清書をして一番良いものを選びださなければならない。

私は心配でしようがなかつた。祖母の体力はもちろん、出品期限まで残りわずかだったからだ。

今までの祖母なら大量に清書をし厳選する。しかし作品はなかなか仕上がるなかつた。そして出品期限が切れてしまつた。出品受取人がギリギリまで待つてくれたが間に合わなかつた。祖母に期限が切れたことを伝えようとした。きっと自分でも期限が切れていることは分かつていただろうがそれでも祖母は筆を置こうとはしなかつた。祖母の作品が完成したのはそれから三日後だつた。そして展覧会の日がきた。

祖母は戸棚から風呂敷を引っ張り出し、作品を丁寧に包んだ。まさかと思つたが祖母は展覧会に行こうとしていたのだ、それも自分の作品を持つて。会場に着くと、車いす生活を送つていたとは思えないほど走りで会場に足を踏み入れた。たくさんの注目をよそに、祖母は作品を広げ始めた。そして、「賞なんていりません。名誉なんていりません。ただ私は今まで待つててくれた人に見てほしいのです。」と深々と頭を下げた。しばらくの沈黙の後、拍手とカメラのフラッシュ音でうめつくされた。そして誰もが祖母の作品を見て驚いた。大きな紙の中心には、微笑んでいる仏様が大きく描かれ、その周りには十年間つもつた感謝の意が書かれていたからだ。

祖母は体力が限界となり座り込んでしまいまた車いすを使うこととなつた。たくさんの人をかきわけるように入り込んだ記者的人が、マイクを向けて言った。

「まるで本物の仏様のようですね。」

りりきつたという達成感にあふれた祖母は、受け入れてもらえた安心顔で笑いながら言つた。

高校生の部

優秀賞

げんでんふれあい
福井財団賞



「『いつてらつ しやい』の力」

河合慎之介さん

(福井県立
福井農林高等学校)

一受賞のことばー

高校の国語の授業として、この作文を書きました。授業で、いろいろな賞に応募していましたけれど、入賞することはありませんでした。この「ふくい風花隨筆文学賞」は、高校生活最後の応募でした。お題は感動する話でした。何を書くかは案外すぐにできただけれど、今回も駄目だろうなと考えていました。入賞を知ったときはとても驚きました。本を読むのは好きだけど、文を書くのは得意ではなかったので、期限ギリギリまでかかりました。結局、思いついたことをそのまま書くことにしました。自分の思いを言葉にすることは得意ではないけれど、文として書いたことで、自分の思いを少し整理できたかと思います。入賞したことによって、文で書いた私の「思い」は、家族や親戚に届いたと思います。私の作文は、このような経験をした、させてしまった人に是非読んでみてほしいと思います。した人は「いつてきます」と言って欲しいから、させてしまった人は「いつてらつしやい」と心の中でも言って欲しいから。

「いつてきます。」そう言って私は、今日も家を出た。返事はない。いつかうだるう。「いつてらつしやい。」が、聞こえなくなつたのは。

「いつてきます。」そう言って家を出ると、「いつてらつしやい。」と、お弁当を作り終えた母が、そう返事をする。「いつてらつしやい。」と、仕事に行く準備をしていた父が、そう返事をする。「いつてらつしやい。」と、朝ご飯をゆっくり食べていた祖母が、そう返事をする。ありふれた日常。いつまでも続くと思っていた日常は、長くは続かなかつた。

高校二年の時の、ゴールデンウイークの始め、私の祖母が死んだ。その時は、まだ、死を実感することができなかつた。入院して、家にいないことが多かつたこともあるが、今まで一緒にいた人が、もう会えないということは、信じられなかつた。しかし、それを実感することになる出来事が起きた。休みも終わり、「いつてきます。」そう言つて、いつも通り、家を出た。「いつてらつしやい。」そう父と母が返事をし

た。しかし、祖母の返事は聞こえない。そこで、私は、祖母がもう帰らない人、うだるう。「いつてらつしやい。」が、聞こえなくなつて、初めて「いつてらつしやい。」には、力があるんだと感じた。

中学校の頃から、それとなく聞いてはいたが、いざ現実のものになると、悲しかつた。だが、悲しんでいる暇などない。私は、父親と共に残つたので、料理などの家事をすることになつた。母親がいた時は、分からなかつたが、家事は大変で、両親がいるありがたさが分かつた。その頃、父は仕事を探していたので、家にはいた。それからの「いつてらつしやい。」には、父の返事しか聞こえることはなかつた。

その後、父は仕事を見つけたが、それが、夜間の仕事だったので、朝には家にいない。「いつてきます。」そう言つて、家を出ても、もう誰の返事も聞こえない。聞くことはできない。

「いつてきます。」を言わなくなつた。そこで、「いつてらつしやい。」が、聞こえなくなつて、初めて「いつてらつしやい。」には、力があるんだと感じた。私は、父親と共に残つたので、料理などの家事をすることになつた。母親がいた時は、分からなかつたが、家事は大変で、両親がいるありがたさが分かつた。その頃、父は仕事を探していたので、家にはいた。それからの「いつてらつしやい。」には、父の返事しか聞こえることはなかつた。

「いつてきます。」を言つことにしている。返事はない。だが、「聴」こえてくる気がする。今は亡き祖母の返事が。仕事を終えて帰つてくる父の返事が。朝ご飯を食べているであろう母の返事が。

「いつてらつしやい。」は、聞こえなくなつたが、聴こえる気がする。だから、私は、返事はなくとも、「いつてきます。」そう言い続けることとする。

第17回ふくい風花隨筆文学賞 作品募集

- 内 容 隨筆（人とのふれあい、見たこと聞いたこと、またはそれについて考えたこと、旅の思い出等自由）
- 応募資格 高校生以上
- 応募規定 400字詰原稿用紙3~5枚、自作・未発表のもの。
(※詳しくは、下記までお問い合わせください。)
- 締 切 平成25年10月31日(木) 当日消印有効

《応募・問合せ先》

「ふくい風花隨筆文学賞」実行委員会事務局（福井県観光営業部文化振興課内）

☎ (0776) 20-0580 [ふくい風花隨筆](#) [検索OK](#)

ふるさと福井人物シリーズ

酒井小浜藩初代藩主・江戸幕府大老

酒井忠勝(三)

文／中島辰男

家光の死、家綱への 政権移譲と忠勝の役割

され、明治維新まで小浜藩のみの寄進によつて守られてきてゐる。)

寛永の末期から慶安にかけて、將軍家光は度々老臣会議を開き、幕府の最

前述のように忠勝は家光の信頼厚く、寛永15年に土井利勝と共に大老になる。

慶安2年、家康の33回忌にあたり忠勝は、家光の寛永の大造替によって絢爛豪華になつた日光東照宮に五重塔を寄進している。このような寄進は3百大名中、唯一の大名寄進建造物であることを、今もって東照宮に参詣する人々が知らされるところである。

日光東照宮五重塔



(この)塔は日光東照宮の建造物と共に世界遺産に登録されている。五重塔は文化12年火災により焼失するが同14年、10代小浜藩主酒井忠進により再建

「歴代徳川家のガルテ」の著者篠田達明氏によると、家光は20～30代はあまり健康でなく、おこり（マラリア）にかかりたり、目を患つたり、回虫が出ていたり、もがき（痘瘡）を患つたりしたが、40代から調子が良くなり、子どもも生まれ健康であったが、高血圧症の前触れに見舞われていた。

大名に対し「家光かくれさせ給い、先代の子家綱に忠節を尽くすべし」と家光の遺命を伝え、更に「古より幼主のときは政道一決せず、危殆ある試しあり」と政権交代時の懸念を述べると、諸大名はその言葉を体して一斉に平伏したといつ。

このことは忠勝の幕閣における地位を示すと共に、家光との深い信頼関係も示しており、忠勝は家光の期待に応えて幕府の政権交代を取りしきり、幕政の安定をもたらしたのである。

忠勝と家綱の間にこんなエピソードが残っている。若い将軍家綱が、屋敷の庭にある大きな石が目障りであると

忠勝は、三河以来の徳川の家臣である譜代三河家臣団の総帥であつた。譜代のため石高は小さいながら三河以来の家臣145家を、譜代大名として全國の要衝に配置した。これは全大名の半数を超えて、百近い外様大名を牽制、監視し、御三家など20余の親藩大名にも取り入つて、徳川政権の安定に寄与した。

Digitized by srujanika@gmail.com

少將軍への羨みであった

大老忠勝の 人となり

入学
昭和20年敗戦により同校
解散、帰郷

福井県連合青年団長、内外海
郵便局長、小浜市内外海公民
館長、福井県教育委員長、福井
県立若狭歴史民俗資料館長な
どを歴任。

「福井県の誕生—近代の越前と若狭—」「若越に想う」「若狭路往還」などの著作多数

Genden Furegi Fukui

Digitized by srujanika@gmail.com

同族の酒井忠次とは異なり酒井忠利系の酒井家はむしろ文人として幕政を時代に適応させて運営した。今で言う極めて「有能な官僚」というべきである。酒井家は文治の家柄であった。

家光の側近中の側近でありながら、忠勝は殉死を許されず、「玉滴隱見」に見るよう世間も忠勝をして生き抜いて、殉死しなかつた他の重臣達をあの世の家光のところへ送るよう期待された忠勝の人柄を、「剛直」シテ淵默、重厚ニシテ嚴格」「君寵ニホコリ權威ヲ振ハシ候様ナル儀アラセラレズ 万事御謙讓御質素」と評し、鼠嫌い、煙草嫌い、合理的で愛嬌もあつたようである。謹厳、実直多くの大名から信望も厚かった。

忠勝の死後約百年後に編纂された前

述の忠勝の言行録「仰景錄」に、「御容貌、ウバロチ、タレ頬、御顔ノ色赤ク、指ニテ推シ候ホドヅツノ黒痘ノ痕ハラリト御座候由」と書かれ、往年の武田信玄に良く似ていたという。その日常生活は「朝6時起床、行水ノ後、8時朝御膳、コレヨリ祐筆ヲ召サセラレ、所用ノ文通弁セラレ、昼御膳、午後2時表工オソ出、夕御膳、午後6時儒者ヲ招キ、8時二終了、10時二御寝所ヘ」この日程は毎日少しの変りもなかつたといふ。

忠勝は学問を好み、本を読めば居ながらにして世界を知る事ができると学問の大切さを説いている。これは小浜藩に好学の藩風を生み、後に杉田玄白、中川淳庵、伴信友など多くの学者を生む事に繋がって行く。

当時江戸と小浜の間の通信は12日から15日を要しているが、忠勝は幕政に専念するため小浜への就国は思うにまかせなかつた。前述のように小浜藩主22年間で都合4回僅か1年に満たなかつたので、藩政への下知（指示）はすべて書下でおこなわれた。現在酒井家文書として小浜市に保存されている外記等3人に当てた書状は「たどえ一人たりとも餓死者出すべからず、如何なる策をとつても領民を救うべし」と命じている。「酒井忠勝書状『小浜市史』（藩政資料編一）」

また忠勝は正保2年から翌年にかけて、家光42歳の厄年の祈願を込めて、領内である若狭・敦賀・高島郡の諸神社諸寺院の修復を行つたといふ。若狭国内では雲濱の天神社、小浜八幡神社、西津大明神、西津弁財天、若狭彦姫神社、明通寺三重塔（小浜市）、比古比売神社、宇波西神社（若狭町）、佐柿山王宮（美浜町）の修理を命じている。相模国鎌倉長谷觀音堂の改築を行い、翌年には高島郡の熊野神社、日枝神社の上葺、羽賀寺鐘楼の建立、佐伎治神社、中山寺（高浜町）の修復、その他多くの社寺の修復に努めている。これらの寄進により、後の寛文2（1662）年の大地震に耐えた社寺が多かつたと言われている。

現在、旧小浜藩領内には県内唯一の国宝建造物に指定されている明通寺本堂や三重塔など重要文化財に指定される。

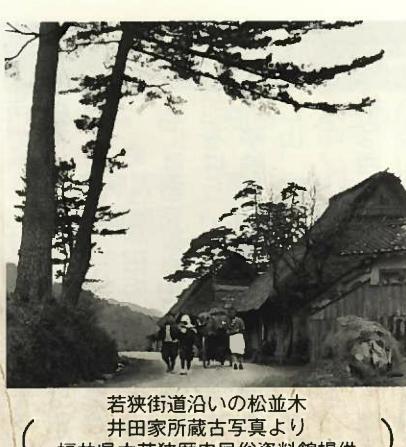
忠勝の死に際して忠勝が諸大名に述べた如く、幼少将軍家綱への政権交代は政権の不安定が付きまとつた。末期養子の制度のなかつたこの時期、大名の廃絶多く、一説に江戸に数万人という牢人がいたといわれている。家光の死と共に牢人たちによる有名な慶安事件が起こる。いち早く状況を把握した忠勝等によって首謀者が自刃して治まるが、以後末期養子が認められるようになって牢人対策は効果を發揮する。

また家臣との繋がりでは、家臣が出張して帰ると目的を報告させるのは当然として、行く先々の山川草木、気候や人心など、現地に入つて初めて分る出先の状況の詳しい報告を求めたという。家臣たる者迂闊に出張から帰るわけにはいかなかつたのである。

若狭路の松並木

忠勝は熊川筋、敦賀筋、丹後筋の道ばたに並木松を植えさせた。これで国の見込みもよく、往還の旅人の為にもよろしいとの想い召しといふ。南山大学名誉教授 須磨千穂氏は杉本泰俊著「若狭の歴史と文化」の発刊を祝う巻頭言で昭和初期の旧制小浜中学教諭の阿萬圓嶽先生の和歌を紹介しておられ

る。「若狭路の並木の松の数減りて昔の姿遠ざかり行く」（この松並木は筆者達の少年期まで若狭では見る事が出来た）。忠勝が述べる古語に、「為十年之謀者植樹、為百年之謀者植徳」と仰せ付けられたという。見事な見識である。



ふくいの
伝統行事

福井県指定無形民俗文化財

高浜七年祭り

高浜町

多彩で華麗な奉納神事



お田植え（中ノ山・事代区）



西山の神楽

太刀振の奉納
(中ノ山・西山・東山)

福井県内で名にし負う有名な祭りは、まず何と言つても「高浜七年祭り」。私見ではおそらく隣県、近県でもこれだけの規模の祭礼はありません。なぜかといえば、6年おきの神事に奉納される民俗芸能

。

（中ノ山・西山・東山）

佐伎治神社の歴史

太刀振・お田植え・神楽・太鼓・屋台囃子・子供踊り・子供太鼓にわか（俄）の華やかな競演に、七年祭りの長祭りの熱狂と氏子たちの熱い奉仕の心が痛感されるからです。

が奉納する太刀振・お田植え・神楽・太鼓・屋台囃子・子供踊り・子供太鼓にわか（俄）の華やかな競演に、七年祭りの長祭りの熱狂と氏子たちの熱い奉仕の心が痛感されるからです。



太刀振（子供）



七基の曳山

祇園祭としての七年祭り

当社は「妙見さん」とも親しく呼ばれるJR高浜駅の背後にある碎導山の北麓、高浜町宮崎字宮内59の3に鎮座しています。祭神は素戔鳴尊・稻田姫命・大己貴命。延喜式式内社大飯郡七座の古社で、「若狭国神名帳」には從三位碎導明神として記載されています。正確な神社の創始については古記録がないため不詳ながら、17世紀初頭の延宝3年の「若州管内社寺由緒記」には、「本来は園部村園池の森と申所水深き田の中少し松」があり、参詣に不便なためこの神社を高浜村八穴山

臣、逸見昌経の高浜城の築城に際し現在地の碎導山山麓に再度移されました。毎年の例祭は10月12・13日に能祭りが行われ、浦安の舞や謡曲・仕舞が神楽殿で奉納されています。

天正年中に若狭の国主武田氏の家を図ったとされています。その後各御旅所でも奉納神事が行われます。三基の神輿の祭神は、中ノ山は荒ぶる御靈神素戔鳴尊。西山は大己貴命（大國主命）。東山は稻田姫命。いずれも出雲神話に登場する神々が町内を巡幸し、厄除をはらい、町に幸福をもたらします。奉納神事の勇壮な太刀振は中ノ山、西山、東山の担当区、華やかなお田植は中ノ山の事代区、莊重かつ滑稽な神樂は西山の担当区が奉納。華麗な神輿はむろん、それぞの宮座

の天王の社の脇に遷して、氏子の社参に便利を図つたとされています。その後祭りの最終日の七日目の還幸祭・本日には、御旅所を出た神輿が旧街道沿いを巡幸して神社に戻り、太刀振・神樂の奉納後、夕刻中ノ山の神輿を先頭に鳥居浜で群衆の熱狂のなか「足洗いの儀」「清祓いの儀」が行われます。再度神社に三基の神輿を納め、夜更けに還靈式を厳かに執行、一週間にわたり長祭りが終わりとなります。や

はり、祭りは若狭、若狭は高浜の七年祭り。ぜひ、六年後にご一見のほど。



鳥居浜での足洗いの儀

群鳥図 一幅 岸 竹堂 筆



実の赤らみ始めたエノキ、团栗
もまだ青々としたコナラ、青いイ
ガから実を覗かせるクリの樹が、
葉を茂らせた枝を交差させるほど
密に寄り添い、上へと伸びていま
す。木々の周囲には、餌を求めて
多種の小鳥が集まって来ており、
一見するどどこか人里近い林の中
の、自然の景観そのままを写し描

いているかと思えます。
さて改めて、画面に目を近づ
け、よくよく眺めて見てください。
枝々の合間や葉の重なり合う裏側
に隠れるように、時に葉の色に溶
け込むように、描きこまれた小鳥
たちの数と種類に驚かれることと
思います。樹木や小動物を生き生
きと写しながら、見る人を楽ししま

せ、驚かせるような趣向も本図の
魅力です。

作者の岸竹堂は近江・彦根の生
まれ。はじめは狩野派を学びます
が、岸派の岸連山に師事して研鑽
を積み、のちに連山の娘を娶って
養子となりました。明治二十九年
(一八九六)、七十一歳で帝室技
芸員となり、翌年七十二歳で亡く

なっています。

□絹本着色
□縦146.5cm 横68.2cm

□江戸後期～明治時代

□落款 岸竹堂寫

□印章 「竹堂」朱文方印

「二日不作二日不食」

福井の民俗文化

暮らしの
古典

冠島と漁民信仰「雄島参り」

シリーズ 10



冠島遠景

舞鶴市成生岬の北北西方、約十キロメートル沖の若狭湾上に冠島と沓島と呼ばれる大小の無人島があり、冠島は別名雄島（おしま）と呼ばれ、大正十三年（一九二四）にオオミズナギドリの繁殖地として日本で最初の天然記念物指定地となつた。この冠島は海難時の避難と祭礼、学術研究の目的以外には立ち入ることができず、上陸には舞鶴市教育委員会への届出による許可制となつてゐる。

この冠島には「雄島参り」と称した大漁と航海安全を祈願する漁民の素朴な信仰習俗があり、今日でも連綿と続いている。雄島参りは冠島に鎮座する老人嶋神社へ団参する神事で、広範な地域からの多種多様な信仰がみられる



老人嶋神社

ことが特徴としてあげられる。雄島参りを行う大半は若狭湾沿岸の漁村で、それらの集落は大漁祈願や航海安全の

神様として、また由良川流域の集落からは養蚕や豊作・雨乞いの神様として信奉され、稻穂や絹糸が献饌されてきた。

雄島参りを行なつてゐる地域の最西端は京都府伊根町蒲入地区で、最東端は高浜町和田地区である。老人嶋神社は社殿に隣接する避難小屋の壁に掛けられた寄進札から、かつては若狭湾沿岸

東部の越前町から鳥取県伯耆地方に至る広範囲なものであつたことがわかる。雄島参りは『稚狹考』第五 散樂祭禮の項に「小島に社ありて、老人島大明神と号す（中略）小島に風習あり、西津小松原の漁夫、高濱の漁夫、老人島大明神を尊崇す。六月十六日祭禮ありて、田邊、宮津の漁夫も押し来る」。また『福井懸太飯郡誌』高浜町風俗習

慣伝説（二）の項には「雄島詣—漁家の青年、毎年陰曆六月十五日三十石船四五隻を艤装し、擊鼓置酒勇ましく丹後宮津沖の該社に参籠す」とあり、若狭と丹後地方の漁師達に古くから今日まで引き継がれてきた伝統ある漁民信仰であることがわかる。高浜町域でもかつては各浦々からの参拜がみられたが、現在では上瀬・小黒飯・高浜（塩土・事代）・和田の四つの漁業協同組合だけが行い、それぞれが日を定めて団体で参拝している。

高浜町域で行われる雄島参りの参拝方法や冠島への上陸方法にはそれぞれ特徴が見られるが、冠島に上陸後、老人嶋神社に紅白の幟を奉納した後、社殿に御供を献饌し団体で参拝する。その後、各自で船玉神社と蛭子神社（瀬ノ宮神社）に参拝し、直会は昼食を兼ねて帰途の船中で行われる、が基本となつてゐる。

また地域によつて多少の差異を持ちあわせてはいるものの、祭祀方法や禁忌についてほぼ共通しており、漁民特有の心意を示してゐる。主に（一）女性や身内に不幸があつた者は参拝できない。（二）新しく船を造つた者はその船と共に参拝する。（三）港を出るとき帰るとき、冠島に着いたとき出るときには船を反時計回りに丁寧に三回まわらせる。（四）老人嶋神社・船玉神社・蛭子神社（瀬ノ宮神社）の順で参拝する。（五）老人嶋神社と蛭子神社（瀬ノ宮神社）に紅白の幟を奉納する。等があげられる。蛭子神社（瀬ノ宮神社）は高浜の漁師達だけが姥越

神社と呼称しその由来は不明であるが、

岩手県久慈市小袖（あまちゃん）で有名な「姥神社」では「姥神社」というのがあり、「恵比寿神社」と共に漁労神として祀られている。



参拝風景

若狭湾沿岸漁民の信仰を集めた冠島の老人嶋神社は、旧來の信仰の痕跡を残留させながらも今なお篤い信仰を集め、伝統ある漁民信仰「雄島参り」は、時代と共に変容しつつ今日に至つている。

平成25年度事業計画及び予算を決定

当財団の平成25年度事業計画及び予算が、3月15日開催の理事会及び評議員会で可決、承認されました。福島原子力発電所の事故を契機に財団の運営も非常に厳しい状況にあります。根ざした信頼される公益財団として、福井県の文化の振興やふれあいとゆとりのある地域づくりに貢献するため、引き続き次の重点施策を中心事業を開いています。

〈重点施策〉

- ① 文化団体等の活動を支援する助成事業の充実
- ② 県内高等学校文化活動への支援
- ③ 魅力ある文化イベント提供事業の推進
- ④ 地域に根ざしたふれあい活動の推進
- ⑤ 文化・芸術を愛する県民風土を高める顕彰事業の推進
- ⑥ 信頼され親しまれる財団広報・広聴活動の展開



事業計画及び予算を審議する評議員会

〈主要事業及び予算額〉

- | | |
|---------------------------|-----------|
| (1) 地域文化の振興等に関する事業 | 18,150 千円 |
| 文化団体等の活動支援、ふくい風花隨筆文学賞協賛 等 | |
| (2) ふれあい、ゆとりの創造に関する事業 | 4,150 千円 |
| 文化講演会の開催、音楽会等への協賛 等 | |
| (3) その他の事業 | 2,104 千円 |
| ホームページ、広報誌発行 等 | |

就任ご挨拶



公益財団法人
げんなんふれあい福井財團
理事長 和智 信隆

先の評議員会及び理事会で選任され、8月1日付けで理事長に就任いたしました。当財団は、日本原子力発電(株)創立40周年記念事業の一環として平成9年に設立され、平成24年には公益財

団法人の認定もいただき、今年で16年目を迎えることができました。東日本大震災に伴う福島原子力発電所での事故により、原子力をとりまく環境は大変厳しい状況にあります。「地域文化の振興を図り」、「ふれあいとゆとりのある地域社会の実現に寄与する」という当財団の定款に定める目的を達成するため、今後とも全力で取り組みます。一層のご指導、ご支援をお願い申し上げまして、就任のご挨拶といった

平成25年度助成事業を決定

—文化団体など 63 団体に 1,159 万円を助成—

平成 25 年度 財団助成事業交付金

助成対象事業	団体数	助成交付金(千円)
地域文化の振興事業	市民文化団体等活動助成	15
	国際文化交流助成	1
	文化のまちづくり助成	12
	ボランティア団体活動助成	5
	市民参加型芸術文化助成	8
	郷土の歴史・文化の保存・伝承活動助成	17
ふれあい及びゆとりの創造事業	芸術公演助成	1
	環境保全等地域づくり助成	3
福井県高等学校総合文化祭等育成支援事業	1	2,000
合 計	63	11,590

当財団では毎年、県内の文化団体等の事業活動に対し、支援、助成を行っています。平成25年度の助成事業は、第1次募集(4~6月実施分)を3月20日に、第2次募集(7月以降実施分)を4月20日に締め切りました。67団体から応募があり、選考委員会を開催して、63団体(新規に助成を受ける団体は19団体)に対し、1,159万円の助成を決定しました。

—財団助成事業の日程等—

8月以降に開催され、一般の方も参加（鑑賞）できる事業の主なものをご紹介します。是非、ご参加ください。
期日等は変更されることがありますので、事前にご確認ください。

事業名	場所	期日	照会先 入場料 その他
ふくい県民総合文化祭 第44回福井県文学コンクール 作品(創作・詩・短歌・俳句・川柳・童話・漢詩)募集		7/1 ~ 8/31	☎ 0776-53-0515 (ふくい文芸の会 市村) 応募料1,000円
県指定無形民俗文化財「福谷大火勢」	おおい町福谷区火勢山	8/14 ~ 15 19:30 ~	☎ 0770-78-1621 (福谷大火勢保存会 中川)
県指定無形民俗文化財「菅浜精霊船送り」	美浜町菅浜海水浴場	8/15 18:00 ~	☎ 0770-38-1116 (菅浜青年会 西野)
ふくい県民総合文化祭 第33回福井県市町文協選抜美術展	県立若狭図書学習センター	9/21 ~ 23 9:00 ~ 17:00 (21日は12時から、 23日は14時まで)	☎ 0770-53-9700 (小浜市文化協会)
アンサンブルG・G ジョイントコンサート シャイニングハーモニー	ハーモニーホールふくい	9/29 14:00 ~	☎ 0776-38-1718 (アンサンブルG・G 木村) 500円
敦賀市民合唱団創立60周年記念第50回定期演奏会	敦賀市民文化センター大ホール	10/6 14:00 ~	☎ 0770-22-9221 (敦賀市民合唱団 望月) 1,000円
ふくい県民総合文化祭 第23回福井県市町文協選抜芸能祭	おおい町総合市民センター 大ホール	10/6 12:00 ~	☎ 0770-77-1150 (おおい町文化協会)
福井市指定無形民俗文化財「オシッサマのお渡り」	福井市本堂 高雄神社	10/12 20:00 ~ 22:30 10/13 14:00 ~ 16:30	☎ 0776-37-1234 (安居公民館内 高雄神社奉賛会)
皆でうたおう「大野うたフェスタ」記念コンサート及び てづくりオペラ「フィガロの結婚」ハイライト	学びの里「めいりん」講堂	10/13 14:30 ~	☎ 0779-65-8007 (ヴォーカルアンサンブルトレモロ 脇本) 1,000円 (中高生500円 小学生以下無料) (整理券が必要)
新たなる沃土へ SABAE を愛した15人のアーチスト展	鯖江商工会議所ギャラリー新 さばえ現代美術センター	10/13 ~ 26 9:00 ~ 17:00	☎ 090-3766-7513 (さばえ現代美術センター 坂口)
太鼓のひびき	鯖江市文化センター大ホール	10/27 14:00 ~	☎ 090-1635-4588 (さばえ太鼓協会 近藤) 1,000円
第27回福井県菊花大会	小浜市交流ターミナルセンター (雲浜公民館)	11/6 13:00 ~ 16:30 11/7 8:30 ~ 15:00	☎ 0770-52-5165 (小浜市菊友会 伊崎)
第5回古墳の里リレーマラソン	若狭町脇袋古墳群周辺	11/10 10:00 ~	☎ 0770-62-0053 (瓜生公民館) 参加料 3,000円
映画「普通に生きる」上映会等	おおい町里山文化交流センター	11/10 (予定)	☎ 0770-67-3121 (あすなろ会 門野)
第2回ダンスフェスティバル in WAKASA	小浜市文化会館大ホール	11/24 13:30 ~	☎ 0770-56-0344 (実行委員会 重田) 一般 1,000円 高校生以下 500円
楽衆玄達～福井の音めぐり～ (福井の歴史、伝統文化、 自然を題材とした楽曲の演奏、朗読)	響のホール	11/30	☎ 0776-97-9950 (NPO法人 楽衆玄達)
おばま男女共同参画のつどい	小浜市働く婦人の家	12/7 13:00 ~	☎ 0770-52-7003 (小浜市働く婦人の家) 090-2377-4593 (芝)
第2回アベサンショウウォネットワーク会議 (石川、福井、京都、兵庫のアベサンショウウォの現状)	越前市福祉健康センター 多目的ホール	12/7 13:00 ~	☎ 090-8965-5398 (福井県両生爬虫類研究会 長谷川)
第3回宇野重吉演劇賞授賞式・受賞作品リーディング上演	福井市文化会館大会議室	12/8	☎ 0776-25-2407 (宇野重吉演劇祭実行委員会 飯田)
福井芸術・文化フォーラム団体設立15周年記念事業 地域とアーティストとの共同制作舞台	福井市文化会館	12/14 ~ 15	☎ 0776-23-6905 (NPO法人 福井芸術・文化フォーラム)
国指定重要無形民俗文化財「敦賀西町夷子大黒綱引き」	敦賀市相生町 (旧西町)	H26年1/19 12:30 ~	☎ 0770-22-0941 (夷子大黒綱引き保存会 大道)
第2回さばえ近松文学賞募集		H26年1月~	☎ 0778-51-3376 (立待公民館)
第27回鹿谷町雪まつり	勝山市鹿谷小学校・鹿谷公民館	H26年2/9 9:30 ~	☎ 0779-89-2111 (鹿谷公民館)
～作曲家別大研究シリーズ～ヨーロピアンミュージックフェスティバル「ちょっと楽しい音楽会」	鯖江市文化センター	H26年2/16	☎ 0778-52-7430 (鯖江市文化センター)
河原市水生寺由縁「壬生狂言」公演	美浜町生涯学習センターなびあす	H26年2/23 13:00 ~	☎ 0770-32-5050 (河原市まちづくり実行委員会 久我)
琴城流大正琴「ハーモニーあすわ」30周年コンサート	ハーモニーホールふくい	H26年3/1 13:00 ~ 15:00	☎ 0776-41-1476 (ハーモニーあすわ 小林)

財団イベント INFORMATION

第2回ふくい和太鼓選手権	福井県内 和太鼓チーム	平成25年 8/11(日)	福井フェニックスプラザ 大ホール	福井新聞社主催 財団協賛 (前売)大人2,000円 子ども1,000円
ビートフェニックス2013	家入レオ 加藤ミリヤ ソナーポケット 高橋優 他	平成25年 9/16(月)	福井フェニックスプラザ 大ホール	福井エフエム放送主催 財団協賛 (前売)6,800円
劇団民藝福井公演「アンネの日記」	八木橋里紗 他	平成25年 11/ 4(月)	福井市文化会館	福井新聞社主催 財団協賛 (前売)4,700円
ワンコイン・オルガンコンサート VIOLIN meets ORGAN	篠崎史紀 山口綾規	平成26年 1/26(日)	福井県立音楽堂 大ホール	福井県文化振興事業団主催 財団協賛 全席自由 500円 小～高校生・車いす席 100円

